
連続

あきくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連続

【Nコード】

N4637E

【作者名】

あきくん

【あらすじ】

SFは少し不思議の略ということで、わたしとしては確実にSFな話です。少女と男とその他の人々が不本意ながらも走り、とても疲れる話です。

連続

女の子に追いかけることがこんなにも大変なことだとは思いませんでした。

わたしは走りながら、ゆっくりと試すように後ろを振り返ってみる。

意に反してやはりそこにはかわいい少女がいる。しかしその少女がどんなにわたしの好みであろうと、今では何の意味も持たないことだった。むしろこうなった原因の一端が少なからずそこにあるのだから、今更ながら後悔を覚えてしまっただけだ。

そうさ……。

無言で迫って来る少女から進行方向に向き直り、わたしは意識して足を速める。

することは決まっている。走って、走って、ただひたすら走るだけ……。理由はあっても目的なんてありはしないし、その理由にしたって感情が先行して行動そのものが理由になっているにすぎない。

なぜ走るのか？

それは逃げるため……。逃げるためにわたしは逃げる。

だが、これでは永遠に終わりのない不毛なことではないか。

……そんなことは解ってはいる。解ってはいるがそれ以上が判らないのだから、結果走るしかないのだ。

始まりは、わたしの知る限りの始まりは、中年の男が走っているのを目撃したところからだった。

そしてその時、走っている人間がいる、そうわたしはただ思った。こんな感想は走っている人間を見た者が、脳内で出来事の処理をしているだけに過ぎないし、実際わたしとしても視覚の反芻に過ぎ

なかったわけだ。ただ今思えば、わたしとの直接的な関係はないにしても、今の出来事とは直接的なつながりがある。

だから接点としての始まりはここだ。

そしてわたしの物語の始まりは、

「おっ・・・」

さらに以前、あえて視点を一点にとどめたこの時に遡る。

ほう・・・。かわいい娘だね。

わたしが思わずもらした感嘆は小柄な少女に向かっている。見るからに制服で、見るからに少女。言い訳がましいが、最近の若者について向けてしまうような一種の嫌悪でも興味でも、まして下心でもなく、ただ自然と視界に入れてしまった、というのが正しい。

ふむ・・・。

わたしは足を止めわずかに首をかしげた。当然のように進んでいく人々や視界を一瞬間づつ遮る自動車、流れに取り残されたようの変な感じだが、かまうことはない。

目が行く。その表現の正否は別にしても、目を引くということは確かにあったと思う。その少女が別段おかしな行動をとっていたわけではないし、突出して目立つ容姿というわけでもなかったが、なびく黒髪に整った顔立ちで何もせずただ立っているのが妙に自然で、時代を考えれば逆に不自然なようでもあって、それがなんともおもしろく見えたのかもしれない。

勝手なことながら、外見の自然さももちろんのことながら内面も申し分ないだろうと感じられ、それが発展途上に過ぎないのか本質なのか、そんな意味のないことを考えたりもした。少女と表記すべきはこんな娘なんだろうと妙に納得しつつわたしは、単に好みなんだろうなと自分の単純さに失笑し、

「ふっ・・・、いやいやいやいや・・・」

すぐに短く息を吐き出し気を落ちつけたのだった。

わたしが少女の数年後にも希望を抱きつつ、周りの流れに合わせて歩き出したその時、少女と一瞬視線が合ったような気がした。

はは・・・。やっぱ、好みなんだろうな・・・。

そんな少女の後ろに薄汚れた中年の男が現れ、その中年の男が最近どこかで見かけた走る人間と同一人物だと気が付いたときには、少女は走っていた。追われ、見るからに必死で走っていた。二人の間に何があつたかわたしには知るよしもなかったし、もちろん走ることに何の意味があるのかなど考えるはずもない。ただ漠然と出来事だけを捉えていた。

だが少女が走る理由はなんとなく解つた。

ん・・・、あれだ。おっさんに追われてるから・・・。

半分冗談でそんな安易な考えをした手前ではあつたが、事態の理解は別として、笑い事ではないことだというのは解つているつもりだ。社会道徳的に見ても少女が追いかけてられているというのはいいことではないし、何時見てもその追いかけてこが続けているというのは普通ではない。なにより単に客観的に見ても、追う側と追われる側の双方が同じような表情であるのはおかしい。

中年の男に浮かぶ明らかな恐怖。例えようもなく疲れ果て、それでも走ろうとしているのは、その気力の原動力であるものは、間違はなくそれに起因している。そして少女に向けられる感情は少し別な、それから逃れるためにすがっているような恐怖ののだと、わたしは感じた。

少女が一人になつてもなお走っているのも同じ理由に思えだし、それはいつそう険しくなつた表情を見れば一目で理解できることだった。ただひとつ違うとすれば、それは少女の場合は押し殺そうとしている、あくまで内面の恐怖ではないかと思われるところ、ではないだろうか。

そう、少女は走っている。いつの間にか恐怖の対象のはずの中年の男はいなくなつたというのに、それでも何時も一人で走っている。何かにおびえ、何かから逃げ、休む間もなくたとえ走る速度が落ちたとしてもけしとまらない・・・。体裁など気にする余裕もないのだろう。顔にべったりと張り付く鈍い光沢の黒髪をかき上げるが、

重たく乱れるだけで風に逆らっているようにも見え、その上息をす
るのも意識しなければできないかのように、口を開け激しく胸を動
かしている。

それが痛々しく、そしてわたしの性癖なのか不謹慎ながらかわい
く、これまで以上に少女を目で追っていた。周りの人間が目を逸ら
そうとしているのも、少女の奇行とも思えるその走り方から理解は
できる。それでも少女が気になるわたしはすでに抜け出せない流れ
に乗っている。

それからしばらくしてから、いまだに一人で走っている少女と目
が合った。少女のすがるような視線は錯覚でも過剰な自意識でもな
く、確かにわたしに投げかけられていた。

少女はわたしがわたしだったから何かを訴えようとしたのではな
く、わたしが少女を何度も意図的に見ていたのに気が付いていたか
ら選んだだけかも知れない。それは考えられることではあったし、
もちろん少女に何もおかしなことが起きていないとしたら、わたし
と接触を求めることが限りなく低い可能性であることが容易に想像
できた。

わたしはそんな少女の変化に気が付いていながらも、目をそらす
こともせずまじまじと見つめていた。あるいは少女がわたしの好
みではなかったら、結果は違っていたかもしれない……。

そして向かってくる少女。それが妙に不気味でわたしはつい後ず
さり、少女の一瞬ゆがんだ口角を見たとき思わず走り出し……、
いや逃げていた。

少女の視線がわたしを捉えているのが判った。

その目は中年の男のそれと同様のものとなっていた。

「んっ!？」

突然に二重にぶれる少女の線。鈍い音と共に倒れこんだ少女と、
それを尻目になんら変わらさずわたしを追ってくる少女。

安易に脱力を感じた。

……やっぱね。

一瞬間で広がる光景。

こうしてわたしは走るようになった。

逃げるために……。

わたしは改めて振り返ってみる。

やはりすぐ後ろには少女が追いかけてきている。そして、わたしと少女が走ってきた後方の線上には、人々に踏まれるような形で少女が横たわっている。ような形でというのは、厳密には人々は横たわる少女に物理的に乗らずに、踏んで走り抜けていくからだ。

おかしいのは人々で、横たわる少女が正しい。なぜなら横たわる少女が物理的に存在しているのが明らかだから……。そう理解できているが、今現在後ろにいる少女が現れてからは、わたしはおかしいほうに身を置いている。だから認識してしまった現実を受け止めなければならぬ。

……違うか。

いや、頭で必要性を感じているのではない。二つの少女とそれに伴って現れた人々……。言うなればそう、ただ怖い。

知りたくもなかった世界は少女と共に広がり、二つの少女を経由してどこまでも一直線につながっているのだ。わたしから始まり少女、そしてすぐ後ろのあの中年の男につながり、その後ろの人間またその後ろの人間、さらにその後ろの知らない者達はその終わりを捉えることもできない。

感覚で解るが彼らはわたしも含めて全員追われて、逃げている。

だから相手の手の届かない間隔を開けて、等速で走っているのだから。

はぁ……。なんでかな……。

少しだけ速度を緩めてみる。

実際確認はしていないが、少女と中年の男から判断するに、彼らは一様に疲れ果て気力すら失っているはずだ。そして命すら失っているはずの彼らは、本来ならばわたしの視界に入ることすら捉えられないこともなく、何事もなく終わっているはずなのだ。なのにわたし

の目には、倒れこむ前より表情の変化が乏しくなった少女と、その他大勢が向かってくるのがはつきりと見えている。

まあ、ある程度はね……。

意識か無意識か、わたしの足は速まる。

彼らは皆わたしの後を蟻の行列のように、一心不乱にそして一糸乱れず一列に追ってきている。彼らとしては前の者を追っているのだろうが、わたしとしては全員に追われているようにしか感じない。つまり、その道筋は少女の道であり、中年の男の道であり、その前の者達の道であり、そしてなによりわたしの創る道というわけなのだ。

こうしてわたしたちは走っていく。規則正しくまっすぐに。前後けて触れることもなく……。

理由は解っている……。いや今なら解る。これは恐怖が作り出した連鎖だ。同じ恐怖を共有する者だけに存在する、そしてこれかも存在し続けるであろうものだ。追われるという進行形の今が理由であって、そこから先が判らないからから走るしかないのだ。

もしわたしが後ろの少女に捕まれば、それは波動のように連続して後ろに伝わって行くはずだ。そして何が起ころのだろうか。もちろん、

「何が起ころ？」

聞いてみたところで返事はない。考えたところで思いつきもしない。

出来事自体は予想の範疇であって、恐怖というものも理解しているが、それでも感じる少女に触れることへの極端な抵抗はいかんともし難いことだ。これが本質なのか、だからこそ皆逃げているのか解らない。

唐突に感じるこの世界。だがそれは以前からわたしを待っていたのだろう。そして認識してしまった時点でその存在はわたしの現実となった。

しかし、だからわたしは走り続けなければならない。

「ヒトが！ つ、救急車！ おい、大丈夫か！」

「まあ、なにかしら」

「ああ、死んでるんじゃないか？」

「女の子か・・・、事故かな」

後ろが騒がしくそしてざわめいているのは、転がっている少女の体に気が付いたからだろう。一部の騒ぐ人間と、間を開けて取り囲む人間達、という構図だろうか。振り向かなくとも想像はたやすい。まったく、人間ってやつは・・・。

「ふざけるなよ・・・」

意味もなく悪態をつき、わたしは走ることに集中する。倒れた少女には失礼な気がするが、すぐ後ろにわりと血色のいい本人がいるのだから別段思うところはない。それよりもざわめきの中心が自分の未来だと思えていやだった。まあ一応、

「ご愁傷様・・・」

つぶやいた。

さて・・・と。

さつさと脇道に入り、気を落ち着けようと短く鼻から息を吐き出し、前を向く。もちろんこの間も足を止めることはない。確認しなくても後ろには少女とその他の人々がついて来ているのは確かだが、それでもやはりと後ろを振り返ってみると、これもやはりわたし好み顔があった。

「やあ・・・」

少女に微妙な笑顔を向け、わたしは内心ではため息をついた。

止まることができないのだから、道筋は限られてくる。信号がなく、車の通りもなく、そしてどこまでもいける道。・・・といっても、そんなところはよっぽどの田舎でしかあるわけがないが、それを理想として後はタイミングで道を渡っていくしかない。深く考えるよりとりあえずは、今いる道を邪魔がない限りどこまでもまっすぐと進んでいくつもりだ。

とは言うものの、だね・・・。

そんな意気込みとは裏腹に、走りながらわたしは否応無しに感じた。意識して見ているわけではないが、流れる景色は良し悪しは関係なく、さして早くもなくそして一定でもない。わかっていた事だが、それはもちろんわたしのせいだ。わたしはあまり動くのは好きではないし、もちろん得意なわけもない。特に走ることなんて昔から、強要されなければ極力避けるようにしてきている。だから効率やペースなんて考えようがないし、そしてその結果かこれなのだ。情けないことだが、今さらなのだからどうしようもない。

それに意識したところでちゃんとした走りができるはずもなく、わたしは結局かつこ悪く走るだけだ。

走り出してからどれだけの時間が過ぎたのだろうか。ふとそんなことを思ったわたしは、今のところまだ見知った道にいた。

両脇に迫ってくるように家々が立ち並び、当たり前だがそれぞれに玄関がある。その前を通ることに、誰かがこつちを見ているのではないかと、こういう道に慣れていなければ緊張するのではないだろうか。しかししばらく経つが未だに周りに人はいない。道自体が狭い路地なので近所の者たち以外には使うこともないようで、人間にすれ違うことすらなかった。

おつ、にゃあさん発見。

「ちよつと見てみ、ほら猫だよ」

視界に入った久々の生き物猫は、塀の上で気持ちよさそうにぐでつとしていた。わたしの気とは裏腹にのんびりとした時間がすぎ、それを助長しているような猫が一匹。定期的に後ろを向いて少女に声を掛けていなければ、わたしも簡単にここの空気に飲み込まれてしまいそうだ。

そんな普段から人の少ない通りのさらに一本外れた路地。いつも通っている道だからたまたま足が向かっていたわけだが、何にせよちよつどこんな走りやすいところにいるわたしはたいしたものだ。普段から変なところ通ってよかった。これなら長持ちしそうだ。

そうもはや人間など皆無だと安心して走っていると、

「をつ！」

玄関先に老人がさりげなく座っていて驚く。もちろんわたしが・

こうして見慣れた町並みを、いつの間にか振り向きもせず駆け足で抜けている。路地を抜けても信号はいい感じで青が続き、あまり記憶のないところに差し掛かっても問題はおきなかった。玄関先にいすを置いて座っている老人の生態を考える余裕すらあったが、ただひとつ言わせてもらえば、広い通りに出ると走っているというだけで若干周りの人間の視線をいくもより強く感じるのが気にはなる。走ってるのがそんなに珍しいのかよ！

言ってやりたかったがやめておく。よく考えたらわたしだって走っている中年の男を見てたわけだし、確かに世知辛い世の中とはいえ、早足は多いが移動手段の駆け足は珍しい。せめてジャージでも着ていれば走りやすいしそれらしいのだが、今のわたしの格好ではただ珍しいだけなのだろう。

しかし疲れる・・・って、

「つとお！」

突然視界が一気に下がり、背中が浮く。どうやら足がもつれたようだ。そんなことを妙に落ちついて確認しているわたしが、それを回避する術は知らなかった。

くっ！

いやな浮遊感から必死で大腿とステップで耐えようとしたが、わたしにそんな芸当ができるはずもなかった。そのまますすべもなく前に滑り込むように倒れる。無論前まわり受身から華麗に立ち上がって、何事もなかったかのように走り出すこともできない。

考えるまでもなく運動不足がたたっているのだろう。わたしは突然のことに驚きはあっても、別に以外とは思わず普通に転んだ。まあ何にせよ転んだのはずいぶん久しぶりな気がする。小さい頃はなぜあんなに転んだのだろうか。

「痛つつ・・・」

単に運動量の違いか。

こういう全体的な痛みも、へばりつく地べたの冷たさも懐かしい。だが何時までも浸っているわけにはいかない。ホラー映画のようにスローモーションで少女が近づいてくるのが、起き上がるうとするわたしの視界の隅に映ったからだ。

少女は速度を落とす、しかし確実にわたしに近づいてきている。なぜゆっくりになったのかはわたしには解らないが、この場面にはぴったりだ。次第に寄ってくる少女は十分な距離と判断したのか、ついにはわたしを求めるかのように手を伸ばしはじめた。

「ととと、待った！ 君だってこんなこと本当はしたくないしょ、こっちもされたくないし。そうだいつそ二人で逃げようよ。ね、そのほうが楽しいしさ・・・」

さすがに焦って意味もなく手足を忙しく動かしながら、わけもわからないことを早口でまくし立てるわたしだが、少女は一瞬の躊躇もなくゆっくりと手を伸ばしてくる。

そう何も変わらないで。動きだけでなく、表情もそして多分内面も・・・。

少女の足から上半身からがわたしを捕らえるようと前のめりになる。その間とらえようのない目がわたしを捉えている。息が詰まりそうになり、これ以上見ていたくない。必死で打開策を模索するが、そんなことはもう決まっている。

いやな汗と虚脱感を振り切り、あわてて起き上がりわたしは逃げた。まったく、

「演出効きすぎだ！」

少女との距離を戻してから叫んだ。

わたしはそのままの勢いで走り続け、気がつくとき自分の鼓動がやけにうるさかった。

改めて落ちて着いて周りを見るとわたしはいつの間にか知らない道にいた。しかも前方には明らかな袋小路。後ろを見れば狭い道のご真ん中に少女。辺りを見回してみても抜けられそうな道はないし、

少女の横を抜けるにはどう考えても狭すぎる。一難さってまた一難とはまさにこの事だ。

「もう少し隅を走ってもらえないかな・・・」

会話は独り言にしかならないのはすでに確認済みだ。それでもと思っただけで話しかけてみたがやはり独り言になるだけだった。

考えるより、

「いいよ・・・。おじゃまします、っと」

唯一いけそうな民家に入る。道ではないがこの際仕方がない。不法侵入なんてなんのその、そのまま塀づたいに進み、適当なところでよじ登って向こう側が道になっているのを確認すると、間髪いれずに飛び降りた。

「ぐっ・・・!!」

足痛・・・。

多少よろめきながら、無理はするものではない、そう本気で思った。

「どうだ！ って、おい！」

足の痛みに耐えようとあえて気合を入れこぶしを作って後ろを向くと、少女が他人様の家をちょうど抜けるところだった。わたしとしてはそれらしく塀をすり抜けてくるかと思っていたのだが、実際には塀の上でお尻をこちらに向けて、

「ちよ、見えてる!!」

白いものをちらつかせながら足をばたつかせる少女の姿が目飛び込んできた。とっさに少女に駆け寄ってしまったが、気づいて足を止める。少女もわたしの斜め上で足を止め、何を思ったかすべるように塀から降りて、いや落ちてきた。

うわ・・・。

実際以上の効果音をわたしに感じさせた勢いそのままに、塀に片手をつき着地点でうづくまる少女。出来れば受け止めてやりたかったが逃げる立場のわたしには無理な話だ。ちなみにこんなのにのんびりしていて大丈夫かといえ、それは問題ない。少女の次、つまり

中年の男がまだ塀を登りきれていないのは確認している。

「あのさ・・・、大丈夫？ あれ、そんな見てないから・・・」

手が届くくらいの距離から少女の背中に行きかけるだけやさしく声を掛けると、それに反応したのかは定かではないが少女は立ち上がり、わたしに振り向いた。そこで感動的なことが、あるはずもなく、少女は読み取れない表情のままわたしに近づき、例のごとくB級ホラー映画のワンシーンのようにゆっくりとわたしに手を伸ばす。若干顔が赤いのは気のせいだろう。

とりあえずわたしは後ろに飛びのき逃げた。当然のように少女も追ってくる。中年の男も一切表情を変えずにもたもたと塀を攻略し、間髪いれず追ってくる。

・・・つまり、わたしの後を完全にトレースしているということか。

その可能性は高い。列を成していることが何よりそれを証明しているし、わたしが登った塀を後ろの者たちも登ったのも興味深い。別の見方をするならば、ものをものとして存在を捉えているということ、さらにあの登り方から考えるに、彼らの基本性能は普通の人間と変わらないようだった。

ともすれば、これなら逃げ切れそうな気がする。

わたしは無意識で空を仰ぎ、たいした考えがあつたわけではないが、いきなり本気で走りだしてみた。すでに体力的に風を切るなど楽しむ余裕はない。途中一度だけ後ろの少女と距離が開いたのを確認すると、あとは振り向きもせずそのまま大通りに出、左右も見ずにそのままの勢いで道を横切る。当たり前だが自動車が邪魔で、自動車からすればわたしが邪魔で、何にせよ一気には渡れない。それでもできるだけ勢いを殺さずにすれすれを通っていく。

たとえば・・・。

たとえば川にでも飛び込んだら、たとえばうまいこと車に乗ってみたら、後ろの彼らはどうするのか。そして今は、たとえば自動車が来ているのに道を渡ってみたら、をなんとなくで実践中だ。わた

しの考えたとおり、後ろの彼らが生きていたときと同じスペックのまま同じ感覚でいるとしたら、この場合は、

「風呂入りたい！」

いやな汗をかきつつ無事道を渡りきったわたしの叫びとは関係なく、だいぶ後ろの少女との距離が開いているはずだ。

そんな期待を込めて視線を後ろに向けると、

「あ、れ？」

無意識のうちになわたしの足は、ゆっくりと動くことをやめた。それは明らかな戸惑いだった。

わたしは眼前の光景に集中する。多少は距離が開いているが思ったより近くに少女がいる。その後ろは、と言えば自動車をよけているのは確かだが、それは常軌を逸している。これはわたしの予想とは違う。

そこにはわたしが渡ったときのように速度を抑える自動車はない。自動車の動きに交通状況以外が関係していないことから、今更ながら後ろの彼らがわたし以外には見えていないことが判る。それなのに彼らは平気な顔をして自動車の間を縫って来る。

あまりにも命知らずだ・・・って元から死んでるじゃん。

わたしは自分の間違いを痛感した。そしてそれは結局本気で走って広げた距離を、道路を渡ることと縮めたただだったようだ。

しかし、行動自体は無駄ではあったが判ったことが三つある。

ひとつは見たまま。後ろの彼らはわたしの後を完全にトレースしているわけではなく、前の者と同じルートを通りつつその中で最短を選んでいくということ。ふたつめはわたしの予想通り、ものの存在を捉えているということ。これは車を避けていることや、何より地に足がついていることや風を感じさせる髪や服から判る。みつつめ、これが厄介で決定的なことだが、彼らは生前と同じ基本性能の元、明らかに体力が無限であるということ。

若干四つの気もするがそれはどうでもいい。

ともかくこれは大きな収穫だ。わたしは再び走り出し、どうして

も整わない呼吸と鼓動と歩調に苛立ちを感じた。体力はすでに限界だ。走っているのか歩いているのか、傍目にはどちらなのだろうか。……。

もうひとつ解ったことがある。

不本意なことだが、逃げ切れない。

そう……。どんなに頭を回転させようと、体力差は補いようがない。可能性にかけての行動であっても衝動的な行動でも、たとえこうやって考えているだけでも、生きている限りは必ず体力を使う。その上回復手段もないのだから、わたしの動きはそう遠くないうちに止まり、もちろんその前の近いうちに動きが鈍くなって後ろの少女につかまる予定となっている。これはわたしでなくとも、例え鍛えぬかれた長距離選手でも同じことだ。

つまり、“そのとき”は必ずやってくることを示唆している。

わたしは周りの景色も人間も、何も気にはしない。大通りに出たことで自分のいる場所は大体把握できたが、どこに向かうともなくわたしの足はただ前に進んでいっている。

ははははは。

急に音として出ない笑いがこみ上げてきた。

さらにもうひとつ解ったことがある。

終わりが見えない。

行列の長さがその歳月を表しているのは明らかであって、わたしの番でそれが終わるとは到底思えないし、むしろ永遠を表しているようにしか見えない。“永遠”に終わりなどあるはずもなく、どこまで逃げきれば終わり、というのが見えないのだから際限なく逃げる必要がある。結果的にそれは永遠の時が必要になる。

ようは、“逃げ切れない”を別の表現にただけに過ぎない。

では、もし体力を補うことができ、自然な終わりがあるとすれば、わたしには勝算があるのだろうか。考えたところでそんなものがあるはずがない。そもそもそんな強靭な精神は持ち合わせていない。

ならば、別の手立てを考えるしかない。

精神もすでに限界だ。

ひとつ希望的な可能性もある。

それは少女のあの動きだ。ぎりぎりまで近づいてもホラー映画の演出のようにゆっくりとなつてなかなか触らないその理由。

疑問。捕まえた後のことまで考えていないのか？ そもそもわたしと同じ立場なのだからわかるはずもない？ むしろ逃げることしか考えていない？ 逃げるために追っている？ もとより意思はない？ 機械的な行動のみのものなのか？

わたしの意志とは関係なく、疑問が整理されずにただ浮かんでは消えていく。

ならば放つて置いて何も起こらないのではないか？ つかまることなどないのではないか？ ただの思い込みでの行動では？

かといって絶対ではないからためせない。もし機械的なものなら、機械ならば行動の次に別の行動がある可能性がある。いや・・・、でも彼らは人間だ。人間が機械的になるとしたらひとつのことに支配されていることが考えられる。ならそれが解けたとしたら余計想像がつかない。生きているときと同じ感覚でいるのなら恐怖に支配されているということか。なら、それを考慮して。

だめだだめだ・・・！ 希望などではなく絶望しか見えて来ない。これは何の感情だ。

ふふ・・・、何か妙に楽しい。

打破する手段はなにかあるだろうか。答え、それは次につながばいい。

彼らがしてきたように次の相手を探さなければならぬ。恐怖をやわらげるにはどうすればいいかなんて簡単なことだ。

次のわたしを探す。

これは連鎖ではなくただの連続だ。意思もなく、感情だけにならざるを得ない。そんなことが意味もなくただずっと続いてきたんだろ。わたしが考えたことだつてとうの昔に誰かが考えたことに違いない。

感情で続いているに過ぎない世界。連鎖なんて法則も意思も、まして横道もない。ただ続いているものに意味なんてないじゃないか。これに取り込まれた時点で終わっていたんじゃないか。

誰か誰か……。誰でもいい。この不安を取り除いてくれ……。って、違う！ わたしに追われてくれ……。

もう解らない。どれだけ走っているんだろう……。

いつそこで死んだほうがこの連続も終わっていい……。いやだ。それこそどうなるかわかったものじゃない。そんな勇気だつてない。所詮は人間なんだ。

早く誰かを。男か女か、子供か大人か、なんとなく気に入ったやつかなんとなく気に入らないやつか、適当でいいか……。

良くない！

くそっ！！ どうせなら、どうせなら女の子追いたいのに、なんでわたしを追つてんだ！

だれのせいだ。わたしか？ ……いや、だれだ！

他のやつ……。なんてだめだ！ 野郎なんて論外、もつと可愛かるうが他の女はなんかな……。やっぱこいつがいいんだよ！

解らない。何が解っているんだ！ 何も解らないじゃないか！

何でこんななつてんだよ！

だいたい解るわけじゃねえか！

きっかけは。きっかけは、きっかけは。きっかけて何のだよ！

ああもう、何考えてんだか解らねえ！

誰誰誰誰、誰なんだよ最初は！

くそっ……。感情が……。

「がっ……！」

なんだ！ 世界が回る。転んだ……？

あいつは……。またゆっくり来る……。何なんだよ。お前は

何がしたいんだ。

いや、何をしたくないんだ。

わたしは表情のない少女をにらみつける。

考える。考える。考える！

「負けるか！！」

わたしは這い上がり、動くことを拒む足を無理やり前に出した。声に出した言葉に意味なんてない。ただの勢いだが、それでもわたしの頭がだいぶすすきりしたのは確かだった。

・・・どうせ死ぬなら確かめる。

また私的なことだが解った、いや判った事がある。わたしはどうやら後ろの少女に気があるらしく、しかも極限状態ではその独占欲が本能から来るようだ。考えるまでもなくこれは問題だ。本来なら誰でも良いから追っ、が正しい気がするが、わたしはあの状態で後ろの少女を求めた。まったくもって笑えない。残り少ない人生もつと理性的な行動を心がけよう。

でも今回はその変態な本能のおかげで助かったんで結果オーライってことで・・・。

わたしは付近の地理をイメージしつつ、最後の目的を果たすための最良の場所を目指すことにした。

そこは通りをはさまずにできるだけ長距離でループになるところ。具体的に目指しているのは昔の城跡で今は公園になっている場所。面識がある場所とはいえずいぶん遠くまで来たものだ。

どんな思考からどんな過程を経てこんな考えが浮かんだのかわからない。だがわたしは、その最後の目標が自分を納得させるためには必要なことだと感じている。

後は先頭を見て終わろう・・・。

思えばわたしが追われる瞬間に少女は行き絶えた。逆を言えば少女は生きている状態でわたしを追ってはいない。しかし中年の男はだいが長い間少女を追っていた様に思われる。何を思っただの行動かは知らないが、それぞれに思いはあったのだろう。どちらがどうか言う気はないが、少なくとも生身に追われなかったのは精神的に良かったことではないかと思う。

わたしは城跡の堀をぐるっと一周回り、出発点にまだ周回に入っ

てない後ろの彼らを見つけると、何かあると嫌なので一応直前で反転、そして少女の真横を通り逆の周回に入る。あとはこれを繰り返せば、いつかは一番最初の人間を見ることができはずだ。もちろん周りには連続に巻き込まれていない一般諸市民がたくさんいて、皆わたしを怪訝な顔で見ているが、それは今のわたしには何の障害にも問題にもなりえない。

わたしはただ、目的のために走るだけだ。

少女にしても中年の男にしても、それぞれにそれぞれな思考の元に次につないできているのだから、わたしがやろうとしていることには次を考えない分、独自性があるのではないだろうか。ようは連続にとらわれることが嫌だと考え直したただけだが、それができたことが少し不思議で妙に落ち着いている。実際先頭を見つけたらどうなるかはわからないが・・・。

わたしは例え歩いていような速度でも、とにかく止まらずに足を進め続けた。そうとう無理をしているのは体の悲鳴を無視しようとしても感じる。しかしすべてはこの瞬間のためだった。この場所に来た理由は安全に走れる場所がほしかったからだが、もうひとつ利点が見つかったのだ。それは、

「はは・・・」

高揚感というのだろうか。今がいったい何周目なのかわからなくなった頃に、ついに周回に入っていない列が消えたのだ。視覚でそれが見えることは気分がいい。もうすぐ最初の人間が見れるのだ。

それからすぐのことだ。

「いた・・・」

連続の最初の人間は一人の男のようだ。わたしは逸る気持ちを抑えつつ、何度も状況を確認する。その男の前にはわたしへと続く連続があり後ろには、何も無い・・・、間違い無い。そして追っている相手は若い女だ。皆一様に無表情な中、最初の人間の緩んだ口元が妙に浮いている。

「お前は欲望に追われているのかっ!」

そんな言葉が自分の口から出たことが意外だと思っ前に、わたしは最初の人間に拳を振り上げていた。

わたしのどこにこんな体力が残っていたのかはわからないが、いつの間にか最初の人間は目の前にいる。わたしの視線は最初の人間を追い、軸足を踏み込み真横から予測顔面直撃コースに拳を叩きつける。が、

「んっ！」

予想外に空を切る。それでもわたしの眼球は最初の人間から視線を外してはいない。しっかりと、列から外れた最初の人間を捉えていた。

「こんなことで！」

列を崩すのか、とただ怒りがこみ上げてきたその瞬間には、すでにわたしは最初の人間の後ろにいた。

そもそもわたしは何も考えていないのだと思う。最初の人間を見る意味も、殴ることの意味も、実際殴ることができののかも。少女を初めて見たときからすでに、結局その時々で感情で動いているだけで、自分で思っているほど理屈や理論で動いてはいない。だが現在進行形の現状では、どんなに理屈をこねたところで何としても殴らなければ気が済みそうもない。

だから、最初の人間に追われていた次の女が足を止めその次の者も止まる、そんな連続の終わりを横目で視界に入れつつも殴ることを優先する。

わたしはただひたすらに最初の人間を追った。何時しか、

「もう終わったんだよ」

と声がかきこえる。足を止めずに振り向くと、後ろに誰も連れず一人追いかけてくる少女の姿が。ついには後ろの少女の連続の終わりをきたようだ。しかし、それがどうしたというのだろうか。

「もういいんだって！」

また少女の声が聞こえる。いったいなんだというのか。わたしの邪魔でもする気なのだろうか。

ほつとけ……。

反射的に心の中でつぶやき、わたしは改めるまでもなく最初の人間を追うことに専念する。

「待ってよ!!」

今度はそんな少女の張り上げた声と足音が後ろから聞こえ、足音は何時までも聞こえ続ける。

わたしはもう振り向きもしない。きつと少女は、わたしを追うという変な目的を持ったせいで止まれなくなっているのだろう。

これだから想いだけの存在は……。

もちろんわたしはわたしで止まる気はない。

最初のやつを殴るまでは……、ん……?

と、不意にわたしは足を止めた。視線だけは外さず、最初の人間の無様な後姿が遠ざかっていくのを、ぼんやりと眺めてみる。

理由は特になかった。強いて言うなれば、ばかばかしい、だろうか。わたしは、急激に冷めていく熱と共に下がっていく頭部をかかえる様に、右手の指先で押さえた。そして勢い良く空を仰ぎ見る。

終わったのか……?

その感慨にふけるまもなく背中に突然感じる衝撃。それは、

「きゃ」

体当たりな少女。今の少女の目的はきつと、わたしをつかまえて話を聞かせることだ。そしてわたしは後ろから抱かれるように少女につかまった。

ふむ……、ということはどうなるんだろう。

ふと落ち着いてみると、新しい疑問が波のように押し寄せてくる。しかし、あえてそれは考えずに放っておく。実は放っておいてもつかまる可能性はないとか、実は死んでいるのではなくそれに近い状態もしくはその瞬間に連続に捕らえられるとか、今となっては考える必要もない。

そもそもつかまらない様にとばかり考えていたが、実際つかまったらどうなったのだろうか。

わたしがつかまえる立場になったら何か解ったのだろうか。

なんて・・・。

何も解るわけない・・・。

何時しかわたしの目には、思い思いに動いている人間しか見えなくなっていた。

まあこのコースはジョギングの名所にはなるだろう。

了

(後書き)

20080615

このような話ですが読んでいただいてありがとうございます。長いのは困ったものです。読みにくく解りにくいのは仕様です、と言いたいのはやまやまですが、そう言える部分と言えない部分が混在しています。

唐突でなんですが、この話には問題点がいくつかあります。

まず一人称。すべてが主観で真実すらも主観になって、空耳でも矛盾でも本気で考えたり、考えすぎると周りに目がいかなくなったり、考え付かなかった真実は切り捨てられたりします。結果、読みにくく解りにくくなります。三人称にしとくべきだったと書きつつ思っていました。でも有りな感じになっただんで良しとしましょう。

次いで長さです。思いのほか長いです。当初ありきたりなところで終わって、ありきたりな話にしようとしていました。だから一人称だったんですが……。それをつい変な話にしくなってしまうたわけです。でも長すぎるのは嫌だったんです。結果、変に長くそして変になりましたとさ。

さらにいつそギャグにしたかったこと。名残がありますが本当は中盤馬鹿やつてもらおう予定でした。でも長さを考えたりそんな雰囲気ではなくなってきたり、そこで力技。そんなこんなで結果、変に長くそして唐突に……。

なにより最大の問題はわたしの技量と継続力です。気合で何とかしたいです。

ちなみに後書きが長いのは、覚え書きみたいな感じで使っているからです。多分言い訳ではありません。

この世の中知らないことだらけ、とよく言いますが、世の中という言葉自体何かに捕らわれているように感じます。そんなことを考えていると、人間をやっている以上はその知っていることは無いに

等しいのではないか、と思ってしまい少し面白くないです。でもまあ、人間なんでそれでいいんじゃないかと・・・。

ともあれ感想を頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4637e/>

連続

2010年10月8日15時08分発行